

紹介と批評

芝田秀幹著

『イギリス理想主義の政治思想』

——バーナード・ボザンケの政治理論——』

1 本書の意図

本書はイギリス理想主義の代表的主張者、バーナード・ボザンケト (Bernard Bosanquet : 1848~1923) の政治思想を説明しようとするものである。わが国では、ボザンケトの名前は、イギリス理想主義の研究者以外には殆ど知られていない。そしてイギリス理想主義の研究者も、トマス・ヒル・グリーン研究との関連でボザンケトに言及することが多く(評者もその一人である)、従ってボザンケト自身に焦点をあてた研究論文は極めて少なく、ましてボザンケトのみを扱った研究書が刊行されることは皆無であった。

しかしボザンケトは、そのような形で放置されておいてよい思想家ではない。彼は「力ではなく、意志が国家の

基礎である」というグリーンの言葉を受け継ぎ、それを自らの政治哲学の中核に据えた思想家であった。イギリス理想主義の見方に従えば、政治は人々の自己実現 (self-realization)、あるいはボザンケトふうにいえば自己統治 (self-government) の意志の表われとして捉えられる。これは、私達が政治の尊厳を保持しようとする限り、常に見失ってはならない観点である。

こうした高い価値を持つボザンケトの政治思想には、何よりもまず、正しい位置付けが与えられなくてはならない。ボザンケト研究書としてはわが国最初のものとなる本書は、このような意図を持って書かれたものである。こうした著者の意図が重要な意味を持つのは、これまでボザンケトに対しては、相反する両極端の立場から様々な批判が投げかけられてきたからである。

一つの批判は、ボザンケトとヘーゲルを結びつけ、ボザンケトの政治思想を国家主義的、あるいは全体主義的なものとみる立場からのものである。もう一つの批判は、社会福祉学、社会政策学の方面からなされるもので、ボザンケトの議論を個人主義、あるいはレッセ・フェール主義の反映と捉える立場からのものである。著者によれば、これらはいずれも、ボザンケトの政治思想の一面にのみ

着目し、それを誇張した見方であるに過ぎない。必要なことは、彼の政治思想の全体像を明らかにすることである。そしてその全体像を踏まえて様々な批判を検証し、彼の政治思想に対する真の評価を提示することである。著者が本書において取り組んでいるのはそうした課題である。

2 本書の内容

次に本書の構成に従って各章の内容を紹介する。序章「イギリス理想主義とボザンケ」においては、ボザンケトに対する様々な批判を取り上げながら、彼の政治理論全体にわたる統一的な見方を導き出したい、という著者の問題意識が述べられている。第1章「思想家、教育家、実践家の相貌」では、ボザンケトの生涯を幾つかの時代に区分しながら克明に追っている。そして、彼が大学に身を置かない在野の研究者であったこと、貧困問題への対処や、教育環境の改善といったことで少なからぬ社会貢献を果たした実践活動家であったこと、加えて理論と実践を統合した真の意味での「知行合一」の人であったことを、彼の生涯の特徴としてあげている。

第2章「人間の意志と『国家』」では、ボザンケトが人間の意志を永続的な充足を目指す「実在意志」と、普段

の欲求充足のために行使される「現実意志」に区分している点に着目する。実在意志はまた、共同善を目指す一般意志でもある。人間の自己統治とは、このような実在意志が現実意志を統治することなのである。ボザンケトは、この自己統治の観念を国家の統治に適用した。そして私達の国家への服従を、他者への服従とはみず、私達の内なる理性への服従と同一視した。著者はこのような考え方のなかに、ボザンケトの国家論の核心を見出している。

第3章「社会契約論・功利主義の超克」の課題は、ボザンケトが行ったホッブズ、ロック、ベンサム、J・S・ミルといったイギリス政治思想に対する批判を検討することである。ボザンケトの批判は、こうした思想においては、いずれも個人を「原子」(atom)として捉え、個性を「排他的で空虚なもの」として理解していることに向けられた。これに対してボザンケトは、個性の実現は社会において、また社会を通じてのみ可能になると主張した。著者はこのようなボザンケトの主張の背後に、普遍的なものが個に宿るとみる「具体的普遍」の考え方があると指摘する。

第4章「卓越せる政治組織——国家」は、ボザンケトの国家論を分析する。ボザンケトにとって、国家とは実在

意志、一般意志あるいは共同善を具現した、「最善の生活」を提示する場である。しかし国家は、この最善の生活を個々人に直接強制しようとはせず、その実現をいわば彼らの内面的省察に委ねるのみである。国家は個々人や社会に対する妨害を妨害するという形でしか、市民生活に介入してはならないのである。著者はこのような国家論は、個々人や社会のあり方を重視し、それによって国家のあり方を制限しようとしている点で決して「国家主義的」なものではないと説いている。

第5章「人權批判と応報刑論」で扱われているのは、ボーザンケトの権利・刑罰論である。ボーザンケトによれば、人間の権利を社会や国家とは無関係なものとする自然権的見解は幻想に過ぎず、社会や国家によって共同善への手段として承認された要求のみが、権利の名に値するものとなる。そして刑罰は、国家が権利を保護するための最終手段として用いる強制力とみなされる。著者は、ボーザンケトの刑罰が刑罰論上の「自由意志論」に立脚した、人間の内的意志作用を重視したものであることに注意を促し、彼の思想の首尾一貫性を強調している。

第6章「社会の自生性と制度」では、ボーザンケトが、家族、私有財産、近隣 (neighbourhood)、階級といった

社会の自生的な制度をいかに重視していたかが示される。ボーザンケトに従えば、このような制度のなかにも共同善が具体化されているのであるから、国家の干渉が、人々の国家への依存度を強めて、自生的な共同善意識を衰弱させるものであつてはならないのである。ボーザンケトは、国家の干渉を「諸妨害の妨害」 (hindrance of hindrances) に限定することで、社会の自生性を尊重した。著者はここにも、見逃してはならないボーザンケトの政治思想の特色があると説く。

第7章「個人の自発性と政策」は、ボーザンケトの国家干渉論を具体化したものとして、彼の社会政策論を検討する。著者によれば、ボーザンケトの説く社会政策とは、共同善を目指す個々人の活動を外部から「遠巻き」に援助するものであり、彼らの自助を背後から支えるものである。著者は、学校給食、無料医療サービス、老齢年金、教育・人口政策、「救世軍」の慈善活動等に関するボーザンケトの見解を検討し、彼が、国家干渉を各人の道徳的発展のための手段として位置付けていたことを明らかにする。要するに、ボーザンケトは国家主義者でも個人主義者でもなく、国家と個人の有機的連関を重視した思想家として捉えられなければならない、というのが本章の結論である。

第8章「『フェビアン』との対決」では、ボーザンケトが貧困への対処の仕方を巡ってフェビアン協会、とりわけウェップ夫妻と激しく対立した状況が描かれている。著者によると、ボーザンケトは貧困を個人の性格の問題に還元して把握した。そして自己統御が可能な「困窮者」とそれが不可能な「窮乏者」を区別し、前者の救済を民間に、後者の救済を国家に委ねようとした。これに対してウェップ夫妻はそうした区別を認めず、貧困を国レヴェルの政策で予防しようとした。著者はここにも、個人の自発性と社会の自生性を尊重しようとしたボーザンケトの姿勢がよく示されているという。

第9章「愛国心と国際協調主義の架橋」で取り上げられるのは、ボーザンケトの国際関係論である。著者はボーザンケトが、国家を共同生活の範囲として認めながらも、遠い将来の可能性としては、世界国家といった国民国家よりも大きな統一体の出現を否定していなかったことに着目する。ボーザンケトにとっては、愛国心とは、私達が共有することによって減じることのない最高善の実現を国に求めることであり、そのような姿勢が、世界的な一般意志の成長に貢献することになるのである。従ってボーザンケトは、国家の究極性をアプリアリに唱えた訳ではないということ

を著者は強調する。

以上の各章の叙述を総括したのが、終章「ボザンケの政治理論」である。著者は、ボーザンケトが国家を共同善実現のための手段と位置付け、また国家を超える政治組織の成立の可能性を示唆していた点で、彼を国家主義的とみるのは妥当ではないという。さらにボーザンケトが個人の自発性、社会の自生性を尊重していた点で、彼を全体主義的と評するのも間違いであると説く。さらにまたボーザンケトが、原子論的個人主義を批判したことを考えれば、彼を個人主義的と位置付けることもできないという。最後に著者は、ボーザンケトの理論が「市民精神」の重要さを強調し、また近時のコミュニタリアニズムと共通点を持っているところに、その現代的意義を認めている。

3 本書の意義

前述の通り本書の意図は、相反する両極端の立場からボーザンケトに浴びせられた様々な批判を取り上げ、それらを検討することで彼の政治思想の全体像を確立することであった。著者はボーザンケトに関する文献を広く渉猟し、それらを厳しく吟味することで、自ら設定した課題に応えることに成功している。ここに本書の大きな意義がある。

それでは著者はボーザンケトのどこに焦点をあて、彼をどう捉えることによって、一方的で偏ったボーザンケト像を退けようとしたのか。

著者が着目したのは、ボーザンケトが、他者統治ではなく、自己統治を行うものとして個人を捉えた点である。そしてそうした個人とは、本書第3章で提示されているように、他者と分断された孤立した個人ではなく、他者との関係を内に含んだ具体的普遍として理解されなければならないものであった。このような個人が自己統治を行うためには、本書第6章で分析しているような自生的な社会がまず必要になる。さらに本書第4章で取り上げた、「最善の生活」を提示する場としての国家も不可欠になる。

この意味での国家とは、ボーザンケトが『哲学的国家理論』において人々の自己統治の究極の単位とみなしている大文字の社会 (Society) のことである (この社会が通常ネーションと呼ばれているものである)。国家的な共同善、すなわち最善の生活は、このような社会において実現される。しかし政治組織、あるいは権力機構としての国家 (State) の役割は「妨害の除去」に限定されているのであるから、政府が最善の生活を直接国民に強制することはあり得ない。

ボーザンケトにとっては、人間とは、自生的な社会や上述の大文字の社会のなかで、そうした社会の提示するものを自発的に自らの内部に取り込み、それらを咀嚼し、吟味し、取捨選択することで、最良の自己を形成して行くべきものであった。このような人間の内的活動が自己統治ということである。要するに人間は、統治すべき自己の内容を社会から受け取るという意味では、徹頭徹尾社会的存在である。しかし社会の与えてくれるものを無反省に受け入れるのではなく、それに内省と批判を加えて自己を形成するのであって、そこに各人の自発性と個性が発揮されることになる。そして国家の役割は、そうした自己統治を「妨害の除去」によって支援することである。

簡単にいえば、これがボーザンケトの国家論 (あるいは人間論) の骨格である。著者はこの骨格を踏まえて、いわれなきボーザンケトへの批判を退け、正しいボーザンケト像を確立しようとした。著者はボーザンケトを国家主義者あるいは全体主義者と断ずる立場に対しては、ボーザンケトが、統治機構としての国家の役割を「妨害の除去」に限定して、個々人の自己統治という、自発的な内面的行為を重視したことを強調する。ボーザンケトを「レッセ・フェール」主義あるいは「反」国家干渉」主義とみなす立場に

対しては、ボーザンケトの説く「妨害の除去」は、積極的で広範囲に及ぶものであり、酒類販売、義務教育、窮乏者の処遇に加え、住宅や賃金に関する国家干渉も想定されていたと著者はいう。しかしそうした国家活動は、個々人の自助、自己統治を促進するためのものであって、国家による個々人の全面救済を目指すものではなかったということにも著者は注意を促している。

上に述べてきた通り、著者はボーザンケトの説く自己統治と国家の密接な関連を的確に把握し、両極端の立場からの批判を検討することで、そうした批判によって揺らぐことのない、明確なボーザンケト像を提示した。従って著者は本書において、自ら設定した課題に立派に応えているということが出来る。

しかし本書の刊行には、単にボーザンケトの全体像を明示したということ以上の意義が認められる。著者のボーザンケト解釈を参考にしながら、次にその問題について考えてみることにしよう。評者は、本書で明示されたボーザンケトの人間論こそ、現代社会において最も重視されなければならないものであると考える。ボーザンケトは原子論的個人主義、すなわち自他の境界を区画し、他者から干渉を受けないことをもって自由とみ、個性の発露とする考え方

を厳しく批判した。私達が今日対処を迫られているのは、この原子論的個人主義である。

ボーザンケトが批判した原子論的個人主義の代表的主張者 J・S・ミルは、社会の専制を防ぐ方法として、思想・良心の自由とそれを発表し出版する自由に加えて、他人を害しない限り好む通りに行為する自由と、同じく他人を害しない限り個人相互間で団結する自由を確保しなければならないと説いた(塩尻公明・木村健康訳『自由論』)。しかし他人を害しない限り何をしてもよいという考え方が過度に信奉されると、私達の追及する善は公的な性格を失って私的なものとなり、社会の道徳的品位は損なわれる。これは私達が今日直面している状況である。

もしも他人を害しない限り何事でも許容されるとすれば、当人同士が合意した上でなされる殺人や重婚は自由な行為の表れであり、禁止すべきものとはみなされなくなる。また女子高生の援助交際も、当然非難すべき筋合いのものは考えられなくなる。このような行為に共通にみられるのは、社会的に承認された(あるいは承認される)目的に従って自己を統治すべし、という意識の欠如である。このような意味での自己統治意識こそ、グリーンやボーザンケトのイギリス理想主義哲学が着目し、政治道徳理論の根底に置い

た観念であった。

人々が自己統治意識を無くした社会とは、人々が自己を支配する根本的で永続的な目的を見失った社会である。アメリカの哲学者I・クリストルは、そうした社会をニヒリズムに侵食された社会として描き出す。クリストルによれば、資本主義下の大企業が、マス・メディアを通じて、ポルノグラフィを称えたり、家族制度を否定したり、市民の反乱を正当化したり、私的所有の倫理を非難したりして、新左翼と一緒に今まで蓄積されてきた資本主義道徳の枯渇を推進している状況は、典型的なニヒリズムの表れである（『ネオ・コンザーヴァティズム』）。

人々が豊富な自由のなかで溺れそうになっている社会では、自由を活用し善用する方途を見出すことは困難になる。そこで人々は、自らの自由を用いて、自らに自由を与えてくれている当の社会を破壊するような行動をもとるのである。このような自己破壊的な行動がニヒリズムである。ボーザンケットが批判した原子論的個人主義には、ニヒリズムを促進する要素はあっても、それを抑制する根拠は殆ど見出せない。

イギリス理想主義の立場では、原子論的個人主義のように、自己なるものを他者と切り離された孤立したものとは

まず、他者との普遍的な関係を内に含んだものと捉える。そして自由とは、孤立した自己の個々バラバラの決断ではなく、普遍的なものを内包した自己が、己を実現するために下す決断をいうのである。私達が社会の道徳的品位を保持し、社会がニヒリズムに侵食されるのを防止しようとするなら、こうしたイギリス理想主義の立場を回復することが急務となる。そのような必要を私達に教えてくれる点でも、本書の刊行には大きな意味がある。

4 おわりに——自己統治と国家——

ボーザンケットの国家理論の中心に置かれているのは、自己統治と国家の関連をどうみるかという問題である。前述の通りボーザンケットは、人々の自己統治を究極的に可能にする単位として、大文字の社会 (Society) を想定した。そして、やがて登場する多元主義的国家論者ほどには用語に拘泥しないボーザンケットは、この社会を現在の国家と同一視した。それでは国家という政治的単位はどのようなように画定されるのか。ボーザンケットによれば、国家の範囲は歴史的偶然と思われるものによって決定されているけれども、そうした偶然の背後に一定の論理が作用しているという。

ボーザンケトの提起する論理とは、「効果的な自己統治に必要な経験の統一と両立できる最も広い領域」が国家として画定される、というものである（『哲学的国家理論』）。効果的な自己統治、すなわち自己統治を意味のあるものにするためには、単に個々の経験を積み重ねることよりも、経験を統一して自己のなかに取り込み、自己のために活かすことができなくてはならない。そのための最も広い領域が国家である。ボーザンケトが言おうとしているのはそういうことである。

本書では、ボーザンケトがいわゆる「国家主義者」ではなかったことを示す例証として、彼が現在の国民国家を一応認めながらも、国民国家を超えた統一体の出現を決して否定していなかったということが述べられている。それはすなわち、国際的な政治組織、国際的な連帯、国家連合、国際道徳、世界的な一般意志といったものであり、ボーザンケトは遠い将来の可能性としてなら、世界国家や人類愛の存在すらも想定していたのである。

ボーザンケトによれば、このような統一体は、私達が共有することによって減じることのない最高善、あるいは最高価値の実現を国家に求めることによって形成される。そのような国家を望むことが真の愛国心である。そして真の

愛国心に貫かれた国家が増えれば増えるほど、国家間に一般意志が形作られ、それが世界的な一般意志へと成長して行くことになる、という。

これは一見抽象的過ぎる表現と思われるかもしれないが、そうではない。例えば今日、地球環境の保全、人権の擁護といったことが国際的な関心を集めるようになっていくが、それはボーザンケトふうにいえば、真の愛国心の求めに応じて最高善を実現する国が増え、その結果、右の関心事を支えるに足る、国際的な一般意志が形成されたためである、とも考えられる。しかし国際的な一般意志なるものを認めると直ちに問題が生じてくる。それは国際的な一般意志と、国家において成り立つ一般意志はどう違うのかという問題である。

地球環境の保全や、人権の擁護に国際的な一般意志の反映を認めるにしても、周知の通り、そうした事項が何を意味し、どう実施されるべきかということに関しては、諸国家間の意見は必ずしも一致するとは限らない。そして国家的な一般意志に担われない限り、国際的な一般意志は実施されない。国際的な組織、国際的な連帯、国際道徳についても、それらを究極において支えているのは、国家的な一般意志である。考えなければならないのは、ボーザンケト

が国際的、あるいは世界的な一般意志の可能性を示唆したことには、どのような意味があるのかという問題である。

もしもポーザンケトの言おうとしたことが、国際的な一般意志と国家的な一般意志は相互に影響し合い、規制し合うということに止まっていたなら、それは均衡のとれた妥当な見解である。国家に制約されるけれども同時にまた国家を制約するものとして、国際的、あるいは世界的な一般意志を認めることは、国際政治を考える上でも意味のあることである。しかし本書が示唆しているように、彼の主張しようとしたことが、国際的な一般意志は国家的な一般意志に優越し、遂には国家を超えた世界国家の樹立を可能にする、ということであるなら、それは人間性の事実に反した受け入れ難い見解となる。

一般意志の観念を最初に提起したJ・J・ルソーの言葉に次のようなものがある。「人間性の感情は、全地上に広がる時は希薄になり、弱くなるようであって、われわれは鞭撻や日本の災難について、ヨーロッパの人民の災難の時ほどには、動かされることはあり得ないようである。利害や同情に活動性を与えるためには、何らかの方法でそれを限定し、圧縮しなければならない」(河野健二訳『政治経済論』)。私達は全地上にわたって同じ強度で、利害感情や

同情心を及ぼすことはできない。このような感情を効果的に作動させるために国家があるともいえるのである。

前述の通りポーザンケトは、経験の統一を可能にし、効果的な自己統治をもたらし最も広い領域として国家を定義し、国家を領域的な限界を持つものと捉えていた。このような国家の見方と世界国家の観念は、矛盾することはないのであろうか。世界国家のなかで、果たして私達は効果的な自己統治を行うことができるのであろうか。遠方の世界で起こったことを近隣で起こったことと同じように感受し、自己の行動に取り込むということが、私達に可能なのであろうか。

本書で述べられている通り、ポーザンケトは人類の進歩に期待して世界国家の観念に言及した、ということも考えられる。しかし国家を一定の質とまとまりを持った領域としてみる見方の前提にあるのは、人間能力の有限性ということである。私達は能力的に有限だからこそ、すなわち、世界中で起こる全ての出来事を有効な経験として自己のなかに取り込めないからこそ、一定の領域を区画し、そこで自己統治を行おうとするのである。ポーザンケトは、人間能力の有限性ということを、本質的で不変的な人間の状態とみていたのだろうか。それとも人類の進歩によって克服

できる一時的な人間の状態と捉えていたのだろうか。

本書は前述の通り、左右両翼からのボーザンケット批判を論駁するために書かれたものであり、その点では十分な成果を収めている。しかしそうした論駁に焦点を当てているため、必ずしも右に述べたような疑点に応答するものにはなっていない。わが国最初の本格的なボーザンケット研究を世に送り出した著者の努力に敬意を表するとともに、次には著者がこうした疑点の解明に取り組み、ボーザンケットの個々の主張ではなく、その背後にある論理の一貫性、整合性を問うことを期待したい。

(芦書房・二〇〇六年二月、A5判・三三七頁・三〇〇〇円)

萬田 悦生